

奨励賞（神奈川県立青少年センター館長賞）

「繋ぐ」

横浜共立学園中学校 3年 ^{くわばら} 栗原 ^{の の か} 野々香

青春。中学生最後の年になって、よく耳にするようになった言葉。定義がふわふわしているからか、少し照れくさくも感じてしまう。

私なりの青春だと思った出来事を思い浮かべると、学校行事や、毎日の他愛のない友達との会話や、みんなで一緒に食べたお弁当が挙げられる。

しかし、まだ私が小学生だった3年前、コロナウイルスの流行によって中高生が一生懸命準備してきた大会も、学校行事もたくさん中止になってしまったというニュースを見た。

時に、青春は制限される。これは時代が違って変わらない。

去年の夏、私は家族で広島原爆ドームと平和記念資料館に行った。そこには、時間が止まったように恐ろしい壊れ方をしている建物と、たくさんの燃えた学生服やぐにゃりと歪んだお弁当箱、皮膚全体が焼けただれている女の子の写真が展示されていた。

きっとこの学生服を着ていた子も、お弁当箱でご飯を食べていた子にも、友達がいて、毎日があった。実際に、女子寮でルームメイトと涙を流しながら、家族と離れた悲しみを分かち合っただけで友情を深めたり、偶然出会った出兵する前の歳が近い男の子と恋に落ちたりすることがあったようだ。

当時の青年達は、苦しみのなかにも、「青春」を見出していた。

しかし、原爆によってその日々は終わりを迎えた。事実、原爆で15,543人も10代の子供達が亡くなった。そしてそれ以上の数の青春が奪われた。

私の4つ下の妹は、原爆ドームに行ってからしばらく、そこで見た恐ろしい戦争の状況を思い出して、なかなか眠りにつけなくなり、泣いてしまう時もあった。早く忘れてくれるといいな、情けないことにそう思うてしまう自分が居た。でも妹は、夏の自由研究で、原爆ドームで学んだことをレポートすることにした。また寝れなくなっちゃうよ、と声をかけても、決めたから頑張るんだ、私がこれをクラスみんなに伝えなくちゃいけない、と泣きながらレポートを完成させた。

はっとした。確かに、苦しいこと、怖いことを忘れて無かったことにするのは簡単で、いくらでもできる。で

もその苦しかったこと、怖かったことがもう起きないように、もう誰もそんなおもいをしないようにしっかり向き合っただけで伝える。それはとても勇気がいるし、難しい。

私たちは今、青春の日々を駆け抜けている。でもそれは楽しいことばかりではなくて涙を流したくなることもある。それでもそんな日々を過ごすことができなかった子供達がいた。そしてこの恵まれた青春はずっと続くことはないし、予期せぬ事態で終わることもある。私たちはこの青春を使って、過去のあやまちと向き合い、平和を学ぶべきだ。もう誰も戦争や原爆で、苦しくて怖いおもいをしなくていいように。無意味に、貴重な青春が途切れることがないように。

青春とは、繋ぐものである。